

第102回 日文研フォーラム



猿から尼まで—狂言役者の修行

From Monkey to Nun : Kyogen Actors' Roles of Passage



ジョナ・サルズ

Jonah SALZ

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 山折 哲雄

● テーマ ●

猿から尼まで—狂言役者の修業

From Monkey to Nun: Kyogen Actors' Roles of Passage

● 発表者 ●

ジョナ・サルズ
Jonah SALZ

龍谷大学 教授
Professor, Ryukoku University



1997年12月9日 (火)

発表者紹介

ジョナ・サルズ

Jonah SALZ

龍谷大学教授

Professor, Ryukoku University

略歴

- 1982年 9 月 ニューヨーク大学演劇科研究助手
1987年 4 月 京都精華大学非常勤講師 関西大学非常勤講師
1988年 4 月 立命館大学非常勤講師
1989年 6 月 ニューヨーク大学演劇研究科夏季集中講座講師
1990年 1 月 同志社大学 A K P プログラム非常勤講師
関西外国語大学アジア研究科・国際科非常勤講師
1992年10月 龍谷大学非常勤講師
1993年 7 月 米国フランクリン・アンド・マーシャル大学アジア研究科客員常勤講師
1994年 9 月 米国フランクリン・アンド・マーシャル大学アジア研究科非常勤講師
1995年 7 月 ワシントン州ポートランド州立大学夏季集中講座客員講師
1996年 5 月 龍谷大学助教授
2002年 4 月 龍谷大学教授

著書・論文等

“Samuel Beckett’s Act Without Words in Kyogen Style” 単著 Ian Watson編、*Actor Training Interculturally*. London : Harwood出版、2001年発行、所収。133 - 152頁。

「時に両者は出会う也：戦後の軋轢のメタファーとしての実験的狂言」。単著。『あうろーら』2000年春、第19号、61 - 72頁

“Beyond tradition : Transmission, reconstruction, innovation” 単著。『国際文化研究』第3号。龍谷大学国際文化学会（1999）：178 - 193頁。

“Creativity continuity and dynamic instability in Japanese traditional theatre” 単著。龍谷大学『国際社会文化研究所紀要』第2号（2000）：69 - 85頁。

“Katafication: form, reform, deform in traditional arts” 単著。龍谷大学『国際社会文化研究所紀要』第3号（2000）：465 - 477頁。

「狂言に『一耳』惚れ」。単著。小学館、2000年発行『新編日本古典文学全集』第60巻『狂言集』綴込み月報69。

〈ビデオ監修〉

ビデオ This is Noh 監修。京都能楽協会発行（2000）

ビデオ Izutsu 監修。京都能楽協会発行（2000）

はじめに

猿に始まって尼に終わる狂言の修業について、ここにシェイクスピアを演じたいと願っている一人の俳優がいるとしよう。その場合、彼がその目的を果たすために取るであろう幾通りもの道が想像できる。しかしいくらそのためだからといって、まだ幼い時期に『マクベス』に登場するバンクオの息子フリーアンスを演じたり、『ハムレット』の中でハムレットを演じる前にレイアーティーズを演じてみたり、更に、六〇歳で『リア王』のリアを演じる「許可を得る」ために、二〇歳代にハムレットを演じる必要はないだろう。むしろ彼は道化師や墓堀人や滑稽な召使いのような様々な役を自由に演じ抜いてゆくかも知れない。上演演目の経験を通して、自分の才能や気質やオーディションの結果により彼独自の成功が決定される。彼は彼自身の判断、そしてまた監督や批評家や聴衆の判断によって自分自身の修業を積むのである。

しかし、これから述べようとする狂言の世界では、プロの狂言役者はこのような自由を全く持たない。彼の訓練は「子宮にいるときから」始まり、彼のキャリアの道は、「Roles of passage」により決定されている。即ちそれは、二五〇曲のレパートリー

中の一〇曲であり、それらは自身の芸を十分に極めるために正しく演じられなければならないとされている。筆者はこれらの演目をアーノルド・ヴァン・ゲネップの「Rites of passage (通過儀礼)」からヒントを得、「Roles of passage」と称する(以下略)。一人前になるための「通過儀礼」のようにこれらの Roles of passage は彼自身の限界へと追い込むために必要とされる試練なのである。それらは又通常の稽古とは正反対の性質を持ち、俳優に新しい技術と自尊心を与えるものである。

修業の軌道

専門家の稽古は、殆どが完全な「型」(パターン化されたフォーム)の習得から成り立っている。稽古は、段階的に難しくなる。即ち、複雑なパターンは型の組み合わせ、或いは様々な種類の型として教えられ、既に習得された型はやがて第二の自然へと変化する。成人してから狂言を学び始めた狂言師丸石やすしは、「基本の型」はあたかも建築の構造に於ける柱のように、狂言役者の芸を磨くための必須技法として自動的に役者の身体より引き出される必要があることを強調している。

しかし狂言の稽古過程は、ただ単に肉体の動きを真似るだけの機械的なものではない。

はつきりと決められた技術習得が中心となるが、その過程において芸術の精神的な深い気づきもたらされる。俳優のキャリアはそれ自体が「修業」または学ぶ過程と考えられ、それは一生を通じての訓練であり、勤勉で熱心な疑似宗教的性質を呈している。この様な狂言役者の修業段階に於ける定められた稽古方法は、その真面目ないここに於ける能や他の日本の殆ど全ての芸道と共通のものである。戦前に活躍した名人、六世野村万藏は、「古い稽古方法は弟子（の時期に）に於いて緊張をもたらすために試みられたもので、寺の門前に立つ下級の僧に向けられるようなものだが、『教えること』よりも、本人に『悟らせる』ように作られている。」と述べている（注 六世野村万藏 一九八二年『狂言への道』 三四七頁）。この様な瞬間は狂言役者の人生を通して規則的な間隔で起こる。役者の修業は、一つ進んだ重要な役を披露することが節目となる。この初めての演技（舞台）は「披（ひらき）」と呼ばれ、これは単なる「初演」でも、標準的演目の中の曲の「初役」でもない。これらの「Roles of Passage」での役者の「イニシエーション（入会）」は、長い修業に於ける時折のスポットライトである。即ちそれは万端役の役者にとって、中央ステージに立つチャンスであり、また、スターの座に昇る者にとっては公的な自分への挑戦であり、著名な役者にとっては修業の持続を証明するものである。師匠、弟子、観客の三者から寄せられた期待の三角形は、これらの役者の

演技にダイナミックな緊張と魅惑を与える。彼らは、これらの重大な時期に焦点を合わせ、役者の個人的な一里塚とその業績に対する公的承認の両方の経歴を生み出す。

披の曲の特殊性

披は、多くの側面において普通のレパートリーの曲と異なる。これらは特別な演技でこれを遂行するにあたっては、特別の襖ぎ、激しい稽古、注意深く検討されたプログラムの中で曲の遂行を絶えず支え続ける配役、適度な品位を持つ演技の場所等が必要とされる。師匠と弟子は共に披もののために、稽古に集中する、何故なら彼らはこれらが家の無形財産を含んでいるということを知っているからであり、それは用心深く守られてきた職人の道具だからである。家の存続は彼らの正しい伝承にかかっているのである。

Roles of passage

才能や環境により修業は多種多様であるが、進む道筋や早さに関わらず、プロの狂言役者の道は披の曲の坂道へと狭められる。

「狂言の修業は猿に始まり、狐に終わる」。これらの動物の役はプロの俳優人生の初めの数十年を形成するが、実際には、後に成し遂げられるべき十分な熟練のためにこの間に取り組まなければならないより多くの役がある。表1は披の役と演目を示すもので、それらが演じられる理想的な年齢、彼らの初体験的な部分、そして特殊技術を示す。そのデビューの演目は、次の段階に進む前に身につけられていなければならない狂言芸の特別な側面を持っていると言われている。口頭の記憶または声の表現のための演目もあれば、リズムミツクな謡や舞によるもの、また微妙な演技表現を徹底的に訓練するところもある。それぞれは役者の身に着いた技術を証明し、また役者として脱皮し、新しく生まれ変わり、自分の芸を深めることができるように、役者を問いただす機会となる。

筆者は狂言役者の「卒業」の演目が、ある種の肉体的精神的鍛錬法として注目に値するだけでなく、狂言の習得方法としての意味解釈の対象にもなり得るということを後述する。

役	種	題名
子供	猿	「以呂波」
那須与市	三番三	「八島」 「翁三番三」
白藏主／狐	夫	「釣狐」 「花子」 「狸腹鼓」
祖父	老尼	「枕物狂」 「此丘貞」 「庵梅」

三老役

極重習い物

青年役

子役

猿から尼まで

最初の二つの披は、大蔵流と和泉流では順序が逆になっている。俳優は三歳から六歳で「靱猿」の快活な猿を演じる（付録あらずじ参照）。

面を着け、毛の付いた衣装を着て、猿曳きが杖で拍子を刻む間、綱に曳き回される。子どもは舞台の存在の重要性を学び、「猿真似」を通じて物真似をし、リズムに合わせて舞う。

『いろは』は大蔵流のデビュー演目である（付録あらずじ参照）。この役では子どもが自分の先生（兄や父親）の言った台詞を繰り返すことにより台詞や仕草を覚えることが求められる。この曲で彼は始めて主（役）を演じる。



『靱猿』の終盤



『靱猿』

十代では、一四歳から一五歳に儀式舞『翫
—三番三（和泉流では三番叟と書く）』を演
じる（付録あらすじ参照）。ここで最初の口
伝を受ける、或いは口頭により伝授される。
これには百日稽古という厳しい稽古がなさ
れ、家族とは別の「別火」による食生活を送
る。彼は靉猿の役以来初めて面を着け、初め
て囃子を伴って舞を経験する。またその足踏
みの複雑なリズムは重心の中心軸である腰の
使い方を発達させると言われている。

同じ様な時期に、彼は「間（あい）」、つま
り能の『八島』の幕間の狂言の語りである
「那須与二」を演じる（付録あらすじ参照）。

この独演による離れ業には、この武勇伝を
語るにふさわしい動作や口調をつくり出すた
めの注意深い呼吸のコントロール、間（ま）



『三番三』の揉の段



『以呂波』

の使い方、つまり複雑な演技の時空間における間隔の取り方が必要とされる。

これは彼が能の中の間狂言で演じる初めての演目となり、これには大きな存在感と高い「位」(級位)が求められる。

『釣狐』は二十歳前後で演じられる(付録あらすじ参照)。これは大学生の「卒業論文」の如く、一般的訓練の習得成果と「一人前」の役者の創造性が評価される。

前半第一場面では僧侶に化した狐の、後半の第二場面ではその狐そのものの描写となっている。釣り狐は悪賢い老狐を真似た普通の歩幅、歩き方、発声法とは全く逆の肉体的「拷問」のような痛烈な挑戦である。精神的にも、長い第一場面の中で、半分獣半分僧侶を演じるには大きな心理的緊張感がある。また、秘伝の中に含まれる「十八箇条」(習い)を覚え込む多大な能力が求められる。全ての披の曲の中で、この演技は最も新しい技術、肉体的に困難な型を含み、役者に「全て一から習うこと」を要求する。

釣り狐と他の二曲は三つの大変重要な演目、「極重習(ごくおもならい)」とされている



『釣狐』の名乗り

る。「狸の腹鼓」は釣狐と似ているが、女性的魅力の表現が要求される。

役者は二つの面、即ち一つの面の上に他の面を着けて演じねばならず、更に後に子をはらむ尼僧の描写に挑む必要がある。

恋人のために捧げられる主人の叙情詩調の長い謡と舞からなる『花子』は、二五歳から三〇歳ころに演じられる（付録あらずし参照）。

この一時間の演技は、謡と舞と演技能力を同時に見せる成熟した役者として立つための曲である。妻には真面目くさり、召使いには厳しく、恋人の花子と会った後はこの上ない喜びに満ちて、という様に演者はすばやく役の雰囲気を変化させなければならない。また、この演目では男の恋を下品に演じてはならない。



『花子』の謡いの場面



『花子』の身変わりの場面

最後に、役者が六〇から七〇歳で演じる「三老曲」のことを述べたい。『枕物狂』、『比丘貞』、『庵の梅』である（付録あらずし参照）。これらには特に身体的なテクニクは含まれていないが、極めて自由で開放的な曲である。それらは俳優の洗練された品格や軽妙なユーモアを表現するための役者に培われた技術や成熟した個性による曲である。観客は、よめく歩行や好色性や面に現れた人物描写を通して、役者の洗練度に気づくだろう。

Roles of passage 通過すべき役の意味

狂言のプロの世界に入るということは、猿から狐、更には老尼僧と、あらかじめ決められた道に沿い続けながら、一生の修業を通じて必要とされる役を一定の方法で学ぶということを意味する。しかし、何の説明もなしに教え込まれた技芸の表面下に意味深い教えが隠されている。この通過すべき役という道によ



『比丘貞』

つて導かれた一生続く演技の道は、決して狭き小道ではなく、狂言修業を三つの明確な類型に分ける三車線ハイウェイの様な道と言えよう。即ちそれらは、職人としての技術的性格、学習システムとしての教育的性格、道という精神修養的性格である。

この通過すべき役の分析により、披の曲が、通常の狂言を通して先に学ばれた必要技術の「試験演目」として演じられるものではなく、披という希にしか演じられない珍しい曲に於いて特別な学習を求めるためのものであるという事を知ることができる。披のユニーク性に関しては表2に見ることができる。

解決すべき問題は、もし狂言の通過すべき役が修業途上の役者への限界を試し、重要な技術を強調するために組まれた「試験演目」であるなら、滑稽な狂言劇のように、何故もつと手短で滑稽な狂言の典型的な演目でないのだろうか。『いろは』は例外としても、標準的な通過すべき役から成るどんな演目にも狂言が持つ典型的な筋や演技や衣装は見られない。

表2 狂言披き物のユニークさ

特徴	面	一人芝居 (ひとり語マイムダンスなど)	囃子	時間の長さ	ストーリー
普通の狂言	狂言の一割しか面を使わない	珍しい	使う事は珍しい	一五分から三〇分間	ユーモラス
披き物	『以呂波』、『那須』、『花子』以外はすべて面を使う	『以呂波』以外はすべて一人芝居の場面あり	『以呂波』、『那須』以外はすべて囃子を使う	『以呂波』以外は三〇分から六〇分間	真面目（心理的に複雑）

教育的手段としての披

明確かつ不明確な教えは、非通常のな披の曲に内在しているようである。はつきりとした芸の型の中に、暗黙の教育的目的が隠されている。

芸術的技術を必要とするとき、役者は演目の主題内容をこなしていくことによって、自分の芸の上達に関わる、主題を越えたものを学んでゆく。表3は披のメタメッセージを要約している。修業者は披の技術の中に刻まれた首尾の良い演技の秘密を学びとる。

表3 狂言披きの役者にとつてのメタメッセージ

演目	メタメッセージ
『以呂波』	主人を打倒する。
『靱猿』	芸によつて命が救われる。
『那須』	戦いに勝つ。つまり自分の芸も的を得ると拍手をえる。
『三番三』	芸の刷新。
『釣狐』	狐と坊主の緊張が役者と役の間の緊張に重なることの魅力。 先祖を大事にして、自分と一族が救われる。
『花子』	美人の催眠術のように、役者も観客を催眠術にかける。
『狸腹鼓』	自分と子供の命が芸の力によつて助かる。
三老役	老境の華。

通過儀礼としての披

披の演目には滑稽さが無いが、これについては、狂言というものが日常とは逆の世界を描いているものであり、披の場合はその逆であると考えると理解しやすい。もし通常の狂言が真面目な状況を滑稽に描くものであるなら、披は通常の狂言を真面目なものに裏返したものである。狂言は普通裏返しの世界を描いている。則ち好色の僧侶や頭の悪い主人、したたかな召使い、威張った女房、不運な泥棒、靈力のない山伏等。逆さまの逆は当然正常な世界である。しかし狂言の逆さま世界は能と混同されてはならない。唯一披の枕物狂いは能がかりタイプであるが、この場合は能のパロディーなのである。披に於いて逆転させられた狂言は、莊嚴さ、幸運（繁栄）、ドラマの複雑さのスペシャルブレンドであり、これは典型的な狂言にも能にも見られない質を表現している。

披を上記した様な通過儀礼の伝統的儀式として見てみるとよい。一般的に、集団的通過儀礼は、ある年齢になるとグループの全てのメンバーにより実施され、多くの場合秘密のものであり、厳しく危険である。しかしそれに正しく従うことにより、少年は成人男性として、またよそ者は秘密社会内部の人間として自動的に承認される。

一方、ヴァン・ゲネップに続くトランスの説のように、シャーマニズム的な通過儀礼

は、個人に特有のものであり、シャーマンの一生を通じて不規則に起こり、予測しがたい結果を伴うものである（一九九四年）。狂言の披は、イニシエーションとシャーマニズム的儀礼の中間的なものである。これらの現象は、役者の一生を通じてそれぞれの経験段階の初期に起こるものであり、役者の身分（位）の変化を示すものである。（表4）

通過すべき役へと旅する狂言役者の一生は「永久の探究」である。披の曲ごとに経験する演技人生の狭間の中で、彼は次に続く旅への助けとなる新しい技を授かるのである。

さらに、各段階ごとに得る新しい技はもつと神秘に満ちている。通過儀礼の中で伝えられる秘密の教えについてのトランスの記述によれば、それらの教えは、神聖なもの

表4 通過儀礼としての披き物

演目	変化
『以呂波』、『靱猿』	子供から修業者へ
『鶏猫』	子供から青年へ
『那須』、『三番三』	青年から大人へ
『釣狐』	弟子から一人前のプロへ
『花子』、『狸腹鼓』	一人前から師匠へ
三老役	晩年の役者から退職者へ

現れとある種の見せかけのどちらをも包含している——則ち入門から今に至るまで隠されてきたものである。

狂言役者が授かるそれぞれの工夫と秘伝もまた同じように、腕に磨きをかけるためのコツと、しかしまた能力を超えたところの重大な秘密をも役者に体得させるものである。各段階で経験を積んでも、根本的な無知を少し減らすことしかできず、決して完全には無知を晴らすことはできない、ということを経験する時、比喩的に言うなら、役者は明示と秘事のこの組み合わせによって、霊的なものを感知するのである。

この明らかにされながらも一方ではまだ秘められているという考えを理論的にまとめてみると、狂言修行者は芸術的に不滅のたどり着くことのないゴールに挑み続けるものであり、狂言への入門者が芸の深さを感知するとき、役者は自分の一生に渡る技術習得の修業が精神的な探究でもあるということを経験する。「本当の習得というものはありませぬ。一度一つのことを習ったなら、本当にそれをマスターしたなら、うまく演じたなら、三つの新しい問題が現れる。次に一旦これらの三つが解決したなら、更に他の一〇の問題が与えられる。従って誰であろうと、全てやり終わったと思っても、それはまだほんの半分にしかならないのです。」（茂山あきら氏へのインタビューより、一九九二年）。外国人芸術家に繰り返し述べられる茂山あきら氏の芸術的マントラは、「ベストという

ことはありません、ベターしかありません」というものである。

参考文献

和泉元秀『狂言を観る』東京 講談社 一九八三

和泉元秀『狂言への招待』東京 講談社 一九九一

小林實『狂言をたのしむ』平凡社カラー新書 No. 33 東京 平凡社 一九七六

小山弘志ほか『狂言の世界』『岩波講座能・狂言』第五卷 東京 岩波書店 一九七八

野村万之丞、荻原達子「狂言のころ」観世栄夫編『能と狂言』所収（伝統と現代 no. 3）東京

学芸書林 一九七〇 六八―八五頁

野村万作『太郎冠者を生きる』東京 白水社 一九九一

野村万作『最後の狐に挑む』東京 NHKソフトウェア 一九九三

小林實、古川久編『野村万藏著作集』東京 五月書房 一九八二

野村万藏『狂言 伝承の技と心』東京 平凡社 一九九五

茂山千五郎『千五郎狂言噺』東京 講談社 一九八三

茂山千之丞『狂言役者 ひねくれ半代記』東京 岩波新書 一九八七

Salz, Jonah. "Roles of Passage : From Monkey to Fox in Kyogen Training." In *Situated Learning in Japan*, ed. John Singleton. Cambridge : Cambridge University Press, 1997 : 85-103.

_____. "Roles of Passage : Coming of Age as a Japanese Kyogen Actor", Ph.D. Dissertation," Department of Performance Studies, New York University, 1997.

Torrance, Robert. *The Spiritual Quest : Transcendence in Myth, Religion, and Science*. Berkeley : University of California Press, 1994.

Turner, Victor. *The Ritual Process : Structure and Anti-Structure*. Chicago : Aldine Publishing, 1969.

Van Gennep, Arnold. *The Rites of Passage*. Trans. Monika B. Vizedom and Gabrielle L. Caffee. Chicago : University of Chicago Press, 1960.

付録

あらすじ

靱猿

太郎冠者を伴って狩に出た大名が、道すがら猿曳きに出会う。大名は猿の皮を靱（矢を入れた筒袋）に掛けたいので猿を譲れと命ずる。猿曳きは大名の強引さに負け、やむなく打杖で猿を殺そうとするが、猿の無邪気に戯れる仕草を見て泣き伏す。大名はこれを見て哀れに思い、猿の命を助ける。猿曳きは喜び、猿歌を歌い、猿が舞うと大名は褒美をやり、自ら猿の仕草をまねて興ずる。

以呂波

父親が子供に「いろはにほへと」の四十八文字を口移しで伝えようとするが、子供は真似ずに先走って語の知識ばかり言い上手く行かず、父はこれを戒め、今度は何でも言うとおりに口真似せよと命じる。すると子供はその命じる口調までも真似し返す。そのうち父が叱り出すと、子はそのとおりに反復して叱り返す。しだいに父は怒り出し、子を

引き回して倒すと、子も同じく父を打ち倒してしまう。

三番三（大藏流以外は「三番叟」と書く）

翁、千歳の舞の後、「揉み出し」という囃子の前奏に乗って三番三が登場し、「揉ノ段」と「鈴ノ段」の二段から成る舞を舞う。口上を述べ大きく足を二回踏み鳴らし前半の舞が始まる。律動的な囃子に合わせ、舞い手の力強く躍動的な足拍子や掛け声が入り、「カラス跳び」と称される跳躍で終盤となる。三番三は黒式尉の面を着け、千歳（又は面箱持ち）との問答の後鈴を受け取り、後段に入る。鈴を振りながら静かに足を踏み飄逸に舞われ、次第に囃子・舞共急調子になり終わる。

那須語（「那須の余市語」ともいう）

能『屋島』の替間である。那須余市が扇的を射た『平家物語』の著明なエピソードを仕方をまじえて演じる。

釣狐

獵師によって一族を次々に殺された古狐（シテ）が、狐つりを止めさせようと獵師の

叔父の伯藏主という僧に化けて獵師に意見をしに行く。狐の執心の恐ろしさを語り、罠を捨て獵を止めるよう約束させたのち、仕掛けてあつた餌を食つてもどる。一方伯藏主の態度に不審を感じた獵師は、餌の食い荒らされた状態を見て、藏主が狐だつたと知り、本格的に狐を捕らえようと罠を仕掛けるが、互いに渡り合ううちに狐は罠をはずして逃げてゆく。

花子

洛外の男が東国に下つた折、宿で馴染みになつた花子と言う遊女が、都へ上つてきており、会いたいと手紙をよこした。男は花子に会いに行こうと決心し、妻には寺へ座禪をしに行くと言つて出かけたが、座禪はせずお供の太郎冠者を自分の代わりに座禪袋をかぶらせ座らせ花子のところに行く。夫の様子を見に来た妻は、男の偽りをあばき、太郎冠者と入れ代わつて座つて男の帰りを待つ。それを知らぬ夫は、朝帰りをし、太郎冠者（実は妻）に花子とのデートの一部始終を話し、更には妻の悪口までを述べてしまう。たまりかねた妻は、座禪袋から顔を出し、怒り狂いながら夫を追い掛けまわす。

狸腹鼓

狸取りを得意とする獵師のところに女狸が、尼に化けて現れ、殺生を止めるよう意見する。獵師は一旦騙されるが、狸と知って弓矢で狙いをつけ、腹鼓を打つところを見せれば助けようと答える。尼は、早変わりで狸の正体を現し、腹鼓を打って獵師と興ずる。

比丘貞

息子が成人したので、長寿で幸せに暮らす老尼に名をつけてもらおうと頼みに行く。老尼は一旦辞退するがやがて承知し、その息子に庵太郎と名付けた。次に名乗りも頼まれ、老尼は自分の比丘尼という呼称を取って比丘貞と付け、錢百貫を祝儀にする。その内に酒宴となり、庵太郎が舞い、やがて老尼も長い舞いをと所望されて祝言の舞いを舞い納める。

枕物狂

百歳をこえた祖父が近ごろ恋に悩むという噂を聞き、二人の孫は、それが事実なら叶えさせたいと、祖父を訪問して事の真相を尋ねると、祖父はついに秘めた恋の相手は、若い娘であると告白する。孫はその乙女を連れてきて祖父と引き合わせる。祖父は老い

の恥をさらした恨み言を謡に託して謡うが、喜びは隠しきれずに、乙女と連れ立つて幕に入る。

庵の梅

梅の花が盛りなので、女達は老尼の庵を訪ねる。老尼は喜んでみなを内へ招き入れ、一同は美しく咲いた梅の花を眺める中、老尼が和歌を所望すると、女達はしたためてきた短冊を梅の花に結びやがて酒宴となる。女達は交互に舞い、老尼もひとさし舞う。宴も終わり女達はなごりを惜しむ謡を謡いながら去る。後には老尼が一人残る。

中村美弥 訳

村中 修 写真

発表を終えて

まずここに、国際日本文化研究センターに対しまして、発表の機会を与えていただいたことに感謝いたします。しばしば実感いたしますのが、この分野の一研究者として、「井の中の蛙」であることです。といいますのは、研究に際して、専門家やプロの役者たちに囲まれ、ともすれば仲間内だけに通じる専門用語を用いて話してしまったり、すでに聞いたことを強化することのみに心をくだいていたりしがちだということです。

今回のように、一般の皆様の前で自分の研究を発表することで、また井上章一先生のような著名な学者のコメントを拝聴することで、私は狂言の「修行の節目」について必要とされる視点を得ることができました。

私にとりましても、たいへん大切な研究の「節目」となりましたことをご報告すると共に、ここに御礼もうしあげます。

ジョナ サルズ



日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ Alessandro VALOTA (ピサ大学助教授) 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11	エンゲルベルト・ヨリッセン Engelbert JORI ^β EN (日文研客員助教授) 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー・A・トンプソン Lee A. THOMPSON (大阪大学助手) 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19	フォスコ・マライーニ Fosco MARAINI (日文研客員教授) 「庭園に見る東西文明のちがい」
⑤	63. 6.14	SONG Whi Chil 宋 彙七 (慶北大学校師範大学副教授) 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9	セップ・リンハルト Sepp LINHART (ウィーン大学教授) 「近世後期日本の遊び—拳を中心に—」
⑦	63.10.11	スーザン・J・ネイピア Susan J. NAPIER (テキサス大学助教授) 「近代日本小説における女性像—現実と幻想」
⑧	63.12.13	ジェームズ・C・ドビンス James C. DOBBINS (オベリン大学助教授) 「仏教に生きた中世の女性—恵信尼の書簡」
⑨	元. 2.14 (1989)	YAN An Sheng 嚴 安生 (北京外国語学院日本語学部助教授) 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元. 4.11	LIU Jingwen 劉 敬文 (遼寧大学日本研究所副所長) 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9	スザンヌ・ゲイ Suzanne GAY (オベリン大学助教授) 「中世京都における土倉酒屋—都市社会の自由とその限界—」
⑫	元. 6.13	HSIA Gang 夏 剛 (京都工芸繊維大学助教授) 「インタビュー・ノンフィクションの可能性—猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛かりに—」

⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント Ernst LOKOWANDT (東洋大学助教授) 「国家神道を考える」
⑭	元. 8. 8	キム・レーホ KIM Rekho (ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授) 「近代日本文学研究の問題点」
⑮	元. 9.12	ハルトムート O. ローターモンド Hartmut O. ROTERMUND (フランス国立高等研究院教授) 「江戸末期における疫病神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3	WANG Xiang-rong 汪 向榮 (中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授) 「弥生時期日本に來た中国人」
⑰	元.11.14	ジェフリー・ブロードベント Jeffrey BROADBENT (ミネソタ大学助教授) 「地域開発政策決定過程を通してみた日米社会構造の比較」
⑱	元.12.12	エリック・セズレ Eric SEIZELET (フランス国立科学研究所助教授) 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑲	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ Sumie JONES (インディアナ大学準教授) 「レトリックとしての江戸」
⑳	2. 2.13	カール・ベッカー Carl BECKER (筑波大学哲学思想学系外国人教師) 「往生—日本の来生観と尊厳死の倫理」
㉑	2. 4.10	グラント K. グッドマン Grant K. GOODMAN (カンザス大学教授・日文研客員教授) 「忘れられた兵士—戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2. 5. 8	イアン・ヒデオ・リービ Ian Hideo LEVY (スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授) 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2. 6.12	リヴィア・モネ Livia MONNET (ミネソタ州立大学助教授) 「村上春樹：神話の解体」
㉔	2. 7.10	L.I. Guodong 李 国棟 (北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師) 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇—文化伝統からの一考察—」
㉕	2. 9.11	MA Xing-guo 馬 興国 (遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授) 「正月の風俗—中国と日本」
㉖	2.10. 9	ケネス・クラフト Kenneth KRAFT (リーハイ大学助教授) 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファットヒ Ahmed M. FATTHY (カイロ大学講師) 「義経文学とエジプトのペーパルス王伝説における主従関係の比較」
②8	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ Karel FIALA (カレル大学日本学科長・日文研客員助教授) 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
②9	3. 2.12	アレクサンドル A. ドーリン Aleksandr A. DOLIN (ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員) 「ソビエットの日本文学翻訳事情—古典から近代まで—」
30	3. 3. 5	ウイーベ P. カウテルト Wybe P. KUITERT (ワーゲニンゲン大学研究員) 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報—ゲオルグ・マイステルの旅—」
③1	3. 4. 9	ミコワイ・メラノビッチ Mikołaj MELANOWICZ (ワルシャワ大学教授・日文研客員教授) 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14	ベアトリクス M. ボダルト・ベイリー Beatrice M. BODART-BAILEY (オーストラリア国立大学リサーチフェロー・日文研客員助教授) 「三百年前の京都—ケンベルの上洛記録」
③3	3. 6.11	サトヤ B. ワルマ Satya B. VERMA (ジャワハルラール・ネール大学教授・日文研客員教授) 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9	ユルゲン・ベルント Jürgen BERNDT (フンボルト大学教授・日文研客員教授) 「ドイツ統合とベルリンにおける森鷗外記念館」
③5	3. 9.10	ドナルド M. シーキンス Donald M. SEEKINS (琉球大学助教授) 「忘れられたアジアの片隅—50年間の日本とビルマの関係」
③6	3.10. 8	WANG Xiao Ping 王 曉平 (天津師範大学助教授・日文研客員助教授) 「中国詩歌における日本人のイメージ」
③7	3.11.12	SHIN Yong-tae 辛 容泰 (東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員) 「日本語の起源 —日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る—」

③⑧	3.12.10 (1991)	HONG YoonSik 洪 潤植 (東国大学校教授) 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
③⑨	4. 1.14 (1992)	サ ヴ イ ト リ ・ ウ イ シ ユ ワ ナ タ ン Savitri VISHWANATHAN (デリー大学教授・日文研客員教授) 「インドは日本から遠い国か?—第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷—」
40	4. 3.10	ジャン=ジャック・オリガス Jean-Jacques ORIGAS (フランス国立東洋言語文化研究所教授) 「正岡子規と明治の随筆」
④①	4. 4.14	リブシェ・ボハフチコヴァ Libuše BOHAČKOVÁ (プラハ国立博物館日本美術元キュレーター・日文研客員教授) 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4. 5.12	ポール・マッカーシー Paul McCARTHY (駿河台大学教授) 「谷崎文学の『読み』と翻訳:アメリカにおける 最近の傾向」
43	4. 6. 9	G. カメロン・ハーストⅢ G. Cameron HURST Ⅲ (ニューヨーク市立大学リーマン広島 校学長・カンザス大学東アジア研究所長) 「兵法から武芸へ—徳川時代における武芸の発達—」
44	4. 7.14	Yoshio SUGIMOTO 杉本 良夫 (ラトロブ大学教授) 「オーストラリアから見た日本社会」
④⑤	4. 9. 8	WANG Yong 王 勇 (杭州大学日本文化研究センター教授・日文研客員助教授) 「中国における聖徳太子」
④⑥	4.10.13	LEE Young Gu 李 榮九 (大韓民国中央大学教授・日文研客員教授) 「直観と芭蕉の俳句」
④⑦	4.11.10	ウィリアム D. ジョンストン William D. JOHNSTON (ウェスリアン大学助教授・日文研客員助教授) 「日本疾病史考—『黴毒』の医学的・文化的概念の形成」
④⑧	4.12. 8	マノジュ L. シュレスト Manoj L. SHRESTHA (甲南大学経営学部講師) 「アジアにおける日系企業の戦略転換 —技術移転をめぐる—」

④9	5. 1.12 (1993)	PARK Jung-Wei 朴 正義 (圓光大学校師範大学副教授・日文研来訪研究員) 「キリスト教受容における日韓比較」
50	5. 2. 9	マーティン・コルカット Martin COLLCUTT (プリンストン大学教授・日文研客員教授) 「伝説と歴史の間—北條政子と宗教」
⑤1	5. 3. 9	Yoshiaki SHIMIZU 清水 義明 (プリンストン大学マーカンド荣誉教授) 「チャールズ L. フリー (1854~1919) とフリー美術館 —米国の日本美術コレクションの一例として—」
⑤2	5. 4.13	KIM Choon Mie 金 春美 (高麗大学校教授・日文研来訪研究員) 「日本近代知識人の思想と実践—有島武郎の場合—」
53	5. 5.11	タキエ・スギヤマ・リブラ Takie SUGIYAMA LEBRA (ハワイ大学教授) 「皇太子妃選定の象徴性 —旧身分文化との関連を中心として—」
54	5. 6. 8	H. W. KANG 姜 希雄 (ハワイ大学教授・日文研客員教授) 「変革と選択: 10世紀の日本と朝鮮 —科举制度をめぐる—」
⑤5	5. 7.13	ツベタナ・クリステワ Tzvetana KRISTEVA (ソフィア大学教授・日文研客員教授) 「涙の語り—平安朝文学の特質—」
⑤6	5. 9.14	KIM Yong-Woon 金 容雲 (漢陽大学教授・日文研客員教授) 「和算と韓算を通してみた日韓文化比較」
⑤7	5.10.12	オロフ G. リディン Olof G. LIDIN (コペンハーゲン大学教授・日文研客員教授) 「徳川時代思想における荻生徂徠」
⑤8	5.11. 9	マヤ・ミルシンスキー Maja MILČINSKI (スロベニア・リュブリアナ大学助教授・日文研客員助教授) 「無常観の東西比較」
59	5.12.14	ウィリー・ヴァンドワラ Willy VANDEWALLE (ベルギー・ルーヴァン・カトリック大学教授・日文研客員教授) 「日本・ベルギー文化交流史—南蛮美術から洋学まで—」
60	6. 1.18 (1994)	J. マーティン・ホルマン J. Martin HOLMAN (ミシガン州立大学連合日本センター所長) 「自然と偽作—井上靖文学における『陰謀』—」

61	6. 2. 8 (1994)	マイヤ・ゲラシモワ Maya GERASIMOVA (ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員) 「外から見た日本文化と日本文学 —俳句の可能性を中心に—」
62	6. 3. 8	オギュスタン・ベルク Augustin BERQUE (フランス・社会科学高等研究院教授・日文研客員教授) 「和辻哲郎の風土論の現代性」
⑥③	6. 4.12	リチャード・トランス Richard TORRANCE (オハイオ州立大学助教授) 「出雲地方に於ける読み書き能力と現代文学、1880～1930」
64	6. 5.10	シルバーノ D. マヒウオ Sylvano D. MAHIWO (フィリピン大学アジアセンター準教授) 「フィリピンにおける日本現状紹介の諸問題」
65	6. 6.14	LIU Jian Hui 劉 建輝 (南開大学副教授・日文研客員助教授) 「『魔都』体験—文学における日本人と上海」
66	6. 7.12	チャールズ J. クイン Charles J. QUINN (オハイオ州立大学準教授・東北大学客員教授) 「私の日本語発見—王朝文を中心に—」
67	6. 9.13	フランソワ・マセ François MACÉ (フランス国立東洋言語文化研究所教授・日文研客員教授) 「幻の行列—秀吉の葬送儀礼—」
⑥⑧	6.11.15	JIA Hui-xuan 賈 蕙萱 (北京大学助教授・日文研客員助教授) 「中日比較食文化論—健康的飲食法の研究—」
69	6.12.20	PENG Fei 彭 飛 (日本学術振興会特別研究員) 「日本語の表現からみた—異文化摩擦のメカニズム—」
⑦①	7. 1.10 (1995)	ミハイル V. ウスペンスキー Michail V. USPENSKY (エルミタージュ美術館学芸員・日文研客員助教授) 「根付—ロシア・エルミタージュ美術館のコレクション を中心に—」
⑦①	7. 2.14	YAN Shao Dang 嚴 紹盪 (北京大学教授・日文研客員教授) 「記紀神話における二神創世の形態—東アジア文化とのか かわり—」

72	7. 3.14 (1995)	WANG Jiahua 王 家驊 (南開大学教授・日文研客員教授) 「渋沢栄一の『論語算盤説』と日本的な資本主義精神」
73	7. 4.11	アリソン・トキタ Alison TOKITA (モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) 「日本伝統音楽における語り物の系譜—旋律型を中心に—」
74	7. 5. 9	リュドミラ・エルマコーワ Lioudmila ERMAKOVA (ロシア科学アカデミー東洋学研究所極東文学課長) 「和歌の起源—神話と歴史—」
75	7. 6. 6	パトリシア・フィスター Patricia FISTER (日文研客員助教授) 「近世日本の女性画家たち」
76	7. 7.25	CHOI KilSung 崔 吉城 (広島大学総合科学部教授) 「『恨』の日韓比較の一考察」
77	7. 9.26	SL Dechang 蘇 徳昌 (奈良大学教養部教授) 「日中の敬語表現」
78	7.10.17	LI Jun Yang 李 均洋 (西北大学副教授・日文研来訪研究員) 「雷神思想の源流と展開—日・中比較文化考—」
79	7.11.28	ウィリアム・サモニデス William SAMONIDES (カンザス大学助教授・日文研客員助教授) 「豊臣秀吉と高台寺の美術」
80	7.12.19	タチヤーナ・ソコロワ＝デリュシナ Tatyana L. SOKOLOVA-DELYUSINA (翻訳家・日文研来訪研究員) 「俳句の国際性—西欧の俳句についての一考察—」
81	8. 1.16 (1996)	ジョン・クラーク John CLARK (シドニー大学助教授・日文研客員助教授) 「日本の近代性とアジア：絵画の場合」
82	8. 2.13	ジェイ・ルービン Jay RUBIN (ハーバード大学教授・日文研客員教授) 「京の雪、能の雪」
83	8. 3.12	イザベル・シャリエ Isabelle CHARRIER (神戸大学国際文化学部外国人教師) 「日本近代美術史の成立—近代批評における新語—」

⑧4	8. 4.16 (1996)	リース・モートン Leith MORTON (ニューキャッスル大学教授・日文研客員教授) 「日本近代文芸におけるゴシック風小説」
⑧5	8. 5.28	マーク・コウディ・ポルトン Mark Cody POULTON (ヴィクトリア大学助教授・日文研客員助教授) 「能における『草木成仏』の意味」
⑧6	8. 6.11	フランシスコ・ハビエル・タブレロ Francisco Javier TABLERO (慶應義塾大学訪問講師) 「社会的構築物としての相撲」
87	8. 7.30	シルヴァン・ギニヤール Sylvain GUIGNARD (大阪学院大学助教授) 「筑前琵琶—文化を語る楽器」
88	8. 9.10	ハーバート E. プルチョウ Herbert E. PLUTSCHOW (カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授・日文研客員教授) 「怨霊の領域」
⑧9	8.10. 1	WANG Xiu-wen 王 秀文 (東北民族学院助教授・日文研客員助教授) 「シャクシ・女・魂 —日本におけるシャクシにまつわる民間信仰—」
90	8.11.26	WANG Bao Ping 王 宝平 (杭州大学日本文化研究所副所長・日文研客員助教授) 「明治期に来日した中国人の外交官たちと日本」
⑨1	8.12.17	CHEN Shen Bao 陳 生保 (上海外国語大学教授・日文研客員教授) 「中国語の中の日本語」
⑨2	9. 1.21 (1997)	アレキサンダー N. メシエリャコフ Alexander N. MESHCHERYAKOV (ロシア科学アカデミー東洋学研究所教授・日文研来訪研究員) 「奈良時代の文化と情報」
93	9. 2.18	KWAK Young-Cheol 郭 永喆 (韓国・漢陽大学文科大学長・日文研客員教授) 「言語から見た日本」
⑨4	9. 3.18	マリア・ロドリゲス・デル・アリサル Maria RODRIGUEZ DEL ALISAL (スペイン・マドリード国立外国語学校助教授・日本学研究所所長) 「弁当と日本文化」

95	9. 4.15 (1997)	ミケレ・レ・D・マルラ Michele F. MARRA (カリフォルニア大学ロサンゼルス校準教授・日文研客員助教授) 「弱き思惟—解釈学の未来を見ながら」
96	9. 5.13	デニス・ヒロタ Dennis HIROTA (京都浄土真宗翻訳シリーズ主任翻訳家 パークレー仏教研究所準教授) 「日本浄土思想と言葉 —なぜ一遍が和歌を作って、親鸞が作らなかったか」
97	9. 6.10	ヤン・シ・コラ Jan SYKORA (チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授) 「近世商人の世界—三井高房『町人考見録』を中心に—」
98	9. 7. 8	Kinya TSURUTA 鶴田 欣也 (ブリティッシュコロンビア大学教授・日文研客員教授) 「向こう側の文学—近代からの再生—」
99	9. 9. 9	ポーリン・ケント Pauline KENT (龍谷大学助教授) 「『菊と刀』のうら話」
100	9.10.14	セオドア・ウィリアム・グーセン Theodore William GOOSSEN (ヨーク大学準教授・日文研客員助教授) 「『日本文学』とは何か—21世紀に向かって」
101	9.11.11	KIM Uchang 金 禹昌 (高麗大学校文科大学教授・日文研客員教授) Livvia MONNET (モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) Carl MOSK (ヴィクトリア大学教授・日文研客員教授) ヤン・シ・コラ Jan SYKORA (カレル大学助教授・日文研客員助教授) Kinya TSURUTA 鶴田 欣也 (ブリティッシュコロンビア大学教授・日文研客員教授) パネルディスカッション 「日本および日本人—外からのまなざし」
102	9.12. 9	ジョナ・サルズ Jonah SALZ (龍谷大学助教授) 「猿から尼まで—狂言役者の修業」
103	10. 1.13 (1998)	KANG Shin-pyo 姜 信杓 (仁済大学校人文社会科学研究所教授・日文研客員教授) 「京都考見録：韓国文化人類学者の経験」

⑩④	10. 2.10 (1998)	GAO Wenhan 高 文漢 (山東大学教授・日文研客員教授) 「中世禅林の異端者——休宗純とその文学」
105	10. 3. 3	シュテファン・カイザー Stefan KAISER (筑波大学教授) 「和魂漢才、和魂洋才——語彙・表記に見る日本文化の特性」
106	10. 4. 7	スミエ・A. ジョーンズ Sumie A. JONES (インディアナ大学教授・日文研客員教授) 「幽霊と妖怪の江戸文学」
107	10. 5.19	リヴィア・モネ Livia MONNET (モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) 「映画と文学の間に——金井美恵子の小説における映画的身体」
⑩⑧	10. 6. 9	Hiroshi Shimazu 島崎 博 (レスブリッジ大学教授・日文研客員教授) 「化粧の文化地理」
⑩⑨	10. 7.14	Peipei Qiu 丘 培培 (バツサー大学助教授・日文研来訪研究員) 「なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか ——詩的イメージとしての典故——」
110	10. 9. 8	ブルーノ・リーネル Bruno RHYNER (チューリッヒ大学講師・ユング派精神分析家・日文研客員助教授) 「日本の教育がかかえる問題点」
⑪①	10.10. 6	アハマド・ムハマド・ファトヒ・モスタファ Ahmed M. F. MOSTAFA (カイロ大学講師・日文研客員助教授) 「『愛玩』——安岡章太郎の『戦後』のはじまり」
⑪②	10.11.10	アリソン・トキタ Alison McQUEEN-TOKITA (モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) 「『道行き』と日本文化——芸能を中心に」
113	10.12. 8	グレン・フック Glenn HOOK (シェフィールド大学教授・東京大学客員教授) 「地域主義の台頭と東アジアにおける日本の役割」
⑪④	11. 1.12 (1999)	Du Qin 杜 勤 (華東師範大学助教授・華東師範大学外国語学院 第2学部副学部長・日文研客員助教授) 「『中』のシンボリズムについて——宇宙論からのアプローチ」

115	11. 2. 9 (1999)	シーラ・スミス Sheila SMITH (ボストン大学助教授・日文研客員助教授) 「日本の民主主義—沖縄からの挑戦」
⑪①⑥	11. 3.16	エドウィン A. クランストン Edwin A. CRANSTON (ハーバード大学教授・日文研客員教授) 「うたの色々：翻訳は詩歌の詩化または死化？」
⑪①⑦	11. 4.13	ウィリアム J. タイラー William J. TYLER (オハイオ州立大学助教授・日文研客員助教授) 「石川淳著『黄金傳説』その他の翻訳について」
⑪①⑧	11. 5.11	KIM Ji Kyun 金 知見 (韓国・仏教教育大学大学院長・日文研客員教授) 「内藤湖南先生の眞蹟—高麗太祖顕陵詩」
119	11. 6. 8	マリア・ヴォイヴォディッチ Marija VOJVODIC (モンテネグロ共和国政府民営化推進部外資担当課長・ 日文研客員助教授) 「言葉いろいろ—日本の言葉に反映された文化の特徴」
⑪②①	11. 7.13	REECE Sachiko Taki リース・幸子 滝 (米国・ケドレン精神衛生センター箱庭療法トレーニングコン サルタント・日文研客員助教授) 「心理臨床の場に映った私生活の中の暴力と社会の中の暴力」
⑪②①	11. 9. 7	SONG Min 宋 敏 (韓国・国民大学校文化大学学長・日文研客員教授) 「明治初期における朝鮮修信使の日本見聞」
122	11.10.12	ジャン・ノエル・A. ロベール Jean-Noel A. ROBERT (フランス・パリ国立高等研究院教授・日文研客員教授) 「二十一世紀の漢文—死語の将来—」
⑪②③	11.11.16	ヴラディスラフ・ニカノロヴィッチ・ゴレグリアド Vladislav Nikanorovich GOREGLIAD (ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク 支部極東部長・日文研客員教授) 「鎖国時代のロシアにおける日本水夫たち」
⑪②④	11.12.14	X. Jie YANG 楊 曉捷 (カルガリー大学準教授・日文研客員助教授) 「鬼のいる光景—絵巻『長谷雄草紙』を読む—」

⑫⑤	12. 1.11 (2000)	エミリア・ガ デ レ ヲ Emilia GADELEVA (日 文 研 中 核 的 研 究 機 関 研 究 員) 「年末・年始の聖なる夜 —西欧と日本の年末・年始の行事の比較的研究」
⑫⑥	12. 2. 8	LEE Eung Soo 李 応寿 (世宗大学校副教授・日 文 研 客 員 助 教 授) 「東アジア獅子舞の系譜—五色獅子を中心に—」
127	12. 3.14	アンナ マリア・ト レ ー ン ハ ル ト Anna Maria THRÄNHARDT (デュッセルドルフ大学教授・日 文 研 客 員 教 授) 「皇室と日本赤十字社の始まり」
⑫⑧	12. 4.11	ペッカ・コ ル ホ ネ ン Pekka KORHONEN (ユワスクラ大学教授・日 文 研 客 員 助 教 授) 「アジアの西の境」
⑫⑨	12. 5. 9	KIM Jeong Rye 金 貞禮 (国立全南大学校副教授・日 文 研 客 員 助 教 授) 「五・七・五、日本と韓国」
⑬⑩	12. 6.13	ケ ネ ス L. リ チャード Kenneth L. RICHARD (県立長崎シーボルト大学教授・日 文 研 客 員 教 授) 「出島—長崎—日本—世界 憧憬の旅 サダキチ・ハルトマン (1867—1944) と倉場富三郎 (1871—1945)」
131	12. 7.11	リュドミラ・ホ ロ ド ヴ ィ ッ チ Lyudmila HOLODOVICH (ソフィア大学助教授・日 文 研 客 員 助 教 授) 「お盆と正教の五旬祭—比較的なアプローチ—」
⑬⑫	12. 9.12	マーク・メ リ Mark MELI (日 文 研 外 来 研 究 員) 「『物のあはれ』とは何なのか」
133	12.10.10	リチャード・ル ビ ン ジ ャ ー Richard RUBINGER (インディアナ大学教授・日 文 研 客 員 教 授) 「読み書きできなかったのは誰か—明治の日本」
⑬④	12.11.14	SHIN Yong-tae 辛 容泰 (東国大学校日本学研究所研究員・日 文 研 客 員 教 授) 「日本語の『カゲ(光・蔭)』外—日本文化のルーツを探る—」
135	12.12.12	CAI Dun da 蔡 敦達 (同済大学日本学研究所助教授・日 文 研 客 員 助 教 授) 「中国文人が観た明治日本—旅行記を読む—」

136	13. 2. 6 (2001)	バルト・ガ ー ンズ Bart GAENS (日文研中核的研究機関研究員) 「長者の山—近世的経営の日欧比較—」
137	13. 3. 6	ポール・S. グローナー Paul S. GRONER (ヴァージニア大学教授・日文研客員教授) 「仏教の戒律とは何か？」
⑬⑧	13. 4.10	李 Zhào 李 卓 (南開大学教授・日文研客員教授) 「中日姓名の比較について—親族の血縁性と社会性—」
⑬⑨	13. 5. 8	エッケハルト・マ イ Ekkehard MAY (フランクフルト大学教授・日文研客員教授) 「西洋における俳句の新しい受容へ」
140	13. 6.12	XU Subin 徐 蘇斌 (日文研外国人研究員) 「中国現代建築の成立基盤 —留日建築家・趙冬日と人民大会堂—」
141	13. 7.10	ヘンリー D. スミス Henry D. SMITH, II (コロンビア大学教授 日文研外国人研究員) 「忠臣蔵再考—四十七士の三百年—」
⑭②	13. 9.18	ジョナサン M. オーガスティン Jonathan M. AUGUSTINE (日文研外来研究員) 「聖人伝、高僧伝と社会事業—古代日本、ヨーロッパの高僧を中心—」
143	13.10. 9	アレクサンダー・ボ ビ ン Alexander VOVIN (ハワイ大学準教授・日文研客員助教授) 「日韓上代言語域：神と国と人と」
144	13.11.13	GUAN Wen Na 官 文娜 (日文研外国人研究員) 「日本社会における『近親婚』と中国の『同姓不婚』との比較」
145	13.12.11	チ グ サ キ ム ラ ス テ ィ ー ブ ン Chigusa KIMURA-STEVEN (ニュージーランド・カンタベリー大学準教授・日文研外国人研究員) 「大庭みな子『三匹の蟹』：ミニスカート文化の中の女と男」
146	14. 1.15 (2002)	SHIN Chan Ho 申 昌浩 (日文研中核的研究機関研究員) 「親日仏教と韓国社会」

147	14. 2.12 (2002)	マシミリアーノ ト マシ Massimiliano TOMASI (ウェスタン ワシントン大学準教授・日文研外国人研究員) 「近代詩における擬声語について」
148	14. 3.12	JEONG Hye Kyeong 鄭 恵卿 (世宗大学校人文科学大学副教授・日文研外国人研究員) 「日韓言語文化の比較—語る文化と語らぬ文化—」
149	14. 4. 9	マッシユー フィリップ マッケルウェイ Matthew Philip McKELWAY (ニューヨーク大学助教授・日文研外国人研究員) 「初期洛中洛外図の人脈と武家作法—三条本を中心に—」
150	14. 5.14	LEE Kwang Joon 李 光濬 (東西心理学研究所所長・日文研外国人研究員) 「禅心理学的生命観」

○は報告書既刊

なお、報告書の全文をホームページで見ることが出来ます。

<http://www.nichibun.ac.jp/dbase/forum.htm>

発行日 2002年7月1日
編集発行 国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話 (075)335-2048
ホームページ：<http://www.nichibun.ac.jp>

© 2002 国際日本文化研究センター

■ 日時

1997年12月 9 日（火）

午後 2 時～ 4 時

■ 会場

国際交流基金 京都支部

